

嘉庫 嘉悦大学学術リポジトリ Kaetsu

University Academic Repository

Universities Serving the community Through
Sport : Twenty-Two Years of the Kaetsu
Housewives' Volleyball Cup

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hoshi, Hiromi メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/204

大学がスポーツにおいて果たす地域貢献のあり方についての一考察

～嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会22年のあゆみをとおして～

Universities Serving the Community Through Sport
: Twenty-Two Years of the Kaetsu Housewives' Volleyball Cup

星 ひろみ

Hiromi Hoshi

<要 約>

大学が果たす役割の一つとして社会貢献が大きく謳われている今日、多くの大学がそのための試行錯誤を繰り返している。しかし、それぞれ大学は、規模も特色も違うのだから地域貢献のあり方も様々である。つまり、大学がその資源をどのように生かして、地域に貢献していくかを良く考える必要がある。

また、地域住民は、大学に対して、より身近で実際に行われかつ、継続される貢献を求めている。大規模なものであれば地域が満足するかといえば、そうとは限らない。

嘉悦大学¹⁾が単科の短期大学時代から続けている「嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会」はけして大規模とはいえない。しかし大学の思い、大会のコンセプトが良く理解され、20年以上継続されてきたことで、真の地域貢献であると周辺地域に認められるに至っている。

本論文は嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会の実績と参加者のアンケートの結果から、大学が行うべき地域貢献に適していることを明らかにしている。スポーツ大会は比較的取り組みやすい上に高い効果が期待できる。さらに、大学や学生のイメージアップに繋がるので、少子化に悩む大学にとって、すぐにでも取り組むべき社会貢献の試みの一つといえる。

<キーワード>

大学の社会貢献、スポーツによる地域貢献、嘉悦大学、家庭婦人バレーボール、嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会、嘉悦杯

はじめに

近年、大学の果たす役割として研究・教育にとどまらず、社会貢献が重要と謳われるようになった。2006年に改正された『教育基本法』においても第3条「生涯学習の理念」が新設され、第7条の「大学」において、大学の成果を社会に貢献する旨がしめされている。このことから多くの大学が各々の大学の特色を生かした社会貢献に取り組んでいるわけだが、現実には難しい問題を抱えている。2007年5～6月に行われた日本経済新聞社の「全国大

学の地域貢献度調査」結果を、専門情報誌『日経グローバル』²⁾は「国立大学、工業系・専門系の大学や、規模の大きい私立大学などを除くと、そうでない大学の抱える問題は大きい」(79号、2007年)としている。この調査項目の中に「組織・制度」「学生」「企業・制度」「住民」とあるが、特に「組織・制度」「企業・制度」となると、比較的規模の小さい大学では難しい課題であろう。さらに、社会貢献を取り上げ、多くの大学の研究室が調査・研究を積極的に行っているが、実際にそれが地域へ還元されているかということ、事例が少ないことから疑問が残る。産学共同、地域連携によつての地域の活性・街づくりも重要だが、地域(地域住民)にとって身近な社会貢献とは何か。壮大なテーマを抱える社会貢献は、時間・予算・人材などの条件なくして進められない。しかし、地域貢献は地域(地域住民)にとって「具体的な貢献」(『日経グローバル』)でなければならないのである。

そこで本稿では地域住民の求める地域貢献とはどのようなものなのかを、特に生涯学習と同様に、地域に受け入れやすいスポーツが可能にした事例を通して示してみたい。

その上で、スポーツが地域貢献に果たす役割が大きいこと、比較的規模の小さい大学でも、地域(地域住民)が求める地域貢献ができること、さらに何よりも地域との共存をテーマに実現・実行と継続が重要であることをあきらかにする。

Iでは、大学の地域貢献の現状を概観し、IIにおいては、嘉悦大学が、嘉悦女子短期大学時代から22年続けてきた嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会の事例を取り上げ、単科の短期大学で実現できた地域貢献をしめす。IIIでは嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会に関するアンケート調査を分析し、II・IIIを踏まえて結論として、スポーツは地域(地域住民)にとって非常に身近な社会貢献であり、それは規模の大きさに関わらず、実現・実行、継続されてこそ意味があり、大学でもその役割を十分果たせることをしめす。

I. 大学の地域貢献の現状と課題

1. 日本経済新聞社調査の「全国大学の地域貢献度調査」

日本経済新聞社が2007年5～6月に行った「全国大学の地域貢献度調査」をうけて、日経グローバル(2007年79号)は、「ベスト100に入った105の大学のうち半数近くの44の大学が専門系大学で、産学連携や行政との連携で成果を出している工業系大学が4分の1を占めている」という。特徴として「①国立大が公立・私立大を上回る“国高・公私低”②西日本にある大学が東日本を上回る“西高東低”の傾向」がわかった。またさらに注目すべき点は「全体の取り組みのレベルは十分でなく、特に組織・制度整備や住民への具体的な貢献の拡充はこれからの課題となる」といった分析であった。ランキングの上位22校中、国立大学は14校、公私立大学は8校である。その公私立校の上位は有名大学・規模の大きい大学である。

2. スポーツを大学の特色として行われる地域貢献

国立大学、専門系・工業系大学でないと、地域貢献は不可能であろうか。確かにレベルの高さや組織・制度の整備を求めれば、多大な時間・予算・人材を要する点で、規模の大きくない大学では実現困難となろう。しかし、地域貢献というものを、地域（地域住民）にとって、身近に感じられるもの、はっきりとした手ごたえを感じるものを前提とするならば、各大学には、必ずそれに応えうる大学の特色があるはずである。

ここではスポーツが地域貢献に効果的であることを2つの事例を取り上げ示してみたい。一つは有名私立大学でなおかつ43もの体育系クラブ・同好会をもつ明治大学、もう一つは単科の短期大学時代に嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会をスタートさせ、今なお続けている（22年間）嘉悦大学である。

① 〈事例〉明治大学の「meiji コミュニティスポーツクラブ」

大学改革提言誌「Nasic Release」（第10号）の明治大学ラグビー部監督・境政義氏、明治大学野球部監督・川口啓太氏、ナジック総合研究所副所長の対談から

『「meiji コミュニティスポーツクラブ」とは明治大学が核となり、自治体、企業、そして地域が長期的な連携のもとに青少年や社会人など、アマチュアスポーツの発展やスポーツの文化に貢献することを目的とした組織である。43ある体育会に体育会本部と「明大スポーツ」紙を加えた母体と、明治大学スポーツファンクラブ（個人、協賛企業）という会員組織が関わっている。』（「Nasic Release」第10号）

例えば卓球部では積極的にジュニア教室・一般向け教室を定期的に関き、指導に当たっている³⁾。

しかし、この「meiji コミュニティスポーツクラブ」の原点は調布市と野球部の関係にある。

『野球部が調布市に球場と寮があったことから1998年より調布市の中学の教員と意見交換しながら野球教室・大会を催し、2004年に明治大学と東京都調布市は相互友好協力協定を締結している。』（「Nasic Release」第14号）

明治大学、野球部の事例のように、調布市との連携で、中学校の教員と意見交換をし、実施しているところなど、まさに、地域と共存した、具体的で身近な貢献の一例である。

明治大学は全国に知れた有名私立大学であり、体育会も十分成熟している団体である。このような規模をもった大学と同じことを小規模な大学が目指すのは容易なことではない。しかし、大学の規模に関係なく、それぞれの大学の特色をいかした地域貢献は必ず実現できるはずである。

次に嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会の事例をあげて、総合大学でもなく工業・専門系大学でない、単科の短期大学で実現させた地域貢献を示す。

②〈事例〉嘉悦女子短期大学（現、嘉悦大学）の「嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会」

嘉悦大学では嘉悦女子短期大学時代の1986年より、地域に対して嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会を行ってきた。これは、地域交流センター（部）といった学内組織にある部署の活動ではなく、「近隣問題」を改善するために、体育科の教員が学園本部に提案し実現したものである。当時、嘉悦女子短期大学には地域交流関連の専属部署はなく、公開講座も開かれていなかった。また、この嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会の担当も、学内組織に入っていない。このような背景の中で、筆者が運営に携わり、スタートしたのだが、結果は「近隣問題」を越えて予想外の反響を呼び、結果20年以上も続けられていくこととなった。きっかけは、大学の事情からであったにせよ、近隣住民に嘉悦女子短期大学を理解してもらうという「地域との共存」が実現し、さらに、地域貢献の充実の礎となった。

多くの大学の研究室が「調査・研究・発表」に止まり、それがフィードバックされず、実際に行われている例は少ない。また、よくあるケースだが、担当部署をつくり、人員を配置して、形の整った企画を考えても、実行に移せないというのでは意味がない。角一典は「地域貢献は常に生きた事業でなければならないし、生きた事業であることにそもそも存在意義がある」（角2004,p.38）といている。筆者も規模の大きさに関わらず、「実現・実行」と「継続」こそ、地域貢献にとって重要と考える。

また、この嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会は、近年のように大学の地域貢献が強く謳われる以前に、地域住民に嘉悦女子短期大学を理解してもらい、いかに地域と共存するかを目的としてスタートしているので、調査・研究のために行われたものではない。そのため、規模は小さくとも、身近で具体的な貢献となり、地域（地域住民）に受け入れられたのである。

次章にて、嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会の成し遂げた地域交流から、単科の短期大学でも地域貢献は可能であることを示したい。

II. 嘉悦女子短期大学（現 嘉悦大学）のスポーツによる社会貢献

1. 嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会の22年

① 嘉悦大学の特色

筆者が所属する嘉悦大学は1903年（明治36年）創立者である嘉悦孝により、日本初の女子を対象にした私立女子商業学校として設立され、100余年の歴史を持つ。2001年（平成13年）に嘉悦大学経営経済学部を開学し、男女共学の四年制大学となるが、それまでの長い歴史は女子の短期大学として知られてきた。

東京都千代田区富士見にキャンパスがあった「日本女子経済短期大学」（当時の名称）（1950

年～1981年)が、東京都小平市花小金井に移転すると共に「嘉悦女子短期大学」と改称、その後創立80周年記念事業の一環である「嘉悦記念体育館」が1986年(昭和61年)花小金井キャンパス内に竣工した。

a) 「嘉悦杯」スタートのきっかけ ～問題改善から始まった地域との共存～

この花小金井キャンパス(東京都小平市)は、緑の多い環境に恵まれた地であるが、一方、一般家屋に隣接するという、近隣住民にとっては受け入れがたい状態があった。短期大学のキャンパスが花小金井に移転が決まってから最終的に体育館が完成するまでの工事期間を含め、常に近隣住民に対して騒音問題、プライバシー保護などに配慮をしていかなければならなかった。

学園・大学としては、近隣住民にいかにかに嘉悦女子短期大学を理解し、受け入れてもらうかが、重要テーマであった。そういった状況の中で、その橋渡し役になったのが「ママさんバレー」といわれる家庭婦人のバレーボールというスポーツである。1986年当時も東京、多摩地区には家庭婦人バレーボール愛好者は多く、チーム数も豊富であった⁴⁾。

また、その連盟「東京都家庭婦人バレーボール連盟」「多摩バレーボール連盟(家庭婦人の部)」「小平市家庭婦人バレーボール連盟」の役員をしている方が近隣に居住されていたことも、この大会を実現させた大きな要因であった。

b) バレーボールに適した「嘉悦記念体育館」の竣工

嘉悦記念体育館は、『パラソルドーム』(『新建築』1986年5月)と呼ばれるテンション膜構造の屋根を持ち、鹿島建設により建築された。天気がよければ電灯がいらぬ明るさで、天井の骨組みを傘のように組むことで、「大空間構造」となっており、天井の障害を避けたいバレーボールなどのスポーツに適している。(「大空間構造の種類」『Technology』No170)さらに、フローアについては、従来の体育館のようなワックスの塗装がなく、ブナ材に特殊加工を施し、滑りにくいように仕上げられており、これもバレーボールには好条件であった。

この嘉悦記念体育館は1986年(昭和61年)4月に竣工されたのだが、1984年に株式会社後楽園スタジアムがエアードームの建設計画を発表していた。これが日本初のドーム球場「東京ドーム」である。竣工は1988年3月であった。(後楽園スタジアム社史編纂委員会編(1990))

東京ドームの評判が広まる中、エアードーム方式ではないが、ドーム型の空間を生かした体育館であるということ、また東京ドームの完成よりも早かったこともあり、嘉悦記念体育館の評判は、様々なところで取り上げられることとなった。当然、スポーツ関係者、バレーボール関係者からの問い合わせがあるのはもちろん、大学周辺の学校・住民の関心も強いものであった。

c) 「嘉悦女子短期大学バレーボール部」の存在 ～大学の特色をいかす～

嘉悦女子短期大学は、学生のクラブ活動の中で、特にバレーボール部に力を注いできた。(のちに「強化指定」クラブとなる) 1986年当時は短期大学でありながら、関東学生バレーボール女子1部校を維持し、全国私立短期大学体育大会(バレーボールの部)に於いて連覇を果たすなどの実績であった。(最終的に1981年(昭和56年)から21年連続優勝、全23回優勝)⁵⁾

当時、嘉悦康人理事兼学長(現 学園長)や嘉悦克常務理事(現 理事長)も体育教育・スポーツ振興に理解があったことで、バレーボール部の活躍や、嘉悦記念体育館完成が実現したといえる。

d) 創立者 嘉悦 孝の女子教育の精神、嘉悦 康人の心の教育

日本初の女子を対象にした商業学校を設立した嘉悦孝は、女性が担う責務は家庭においても、職場においても重要とし、人と人の歩みよりで育む愛の大切さこそ、生活が潤うとしている。その後、嘉悦康人理事長兼学長(現学園長)がその意志を受け継ぎ、女性の社会・家庭での役割の大切さを掲げてきた。さらに「徳育・体育・知育」を唱え、あえて知育を一番うしろにもってくるのは、「人間は健康であってこそ、心も健全でいられる」とし、偏差値教育の風潮を嘆いた。創設者嘉悦孝から受け継いだ精神と、体育・スポーツを愛する嘉悦康人学長の思いが、家庭婦人バレーボールの選手(妻・母)たちにとって、そして嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会にとっても欠かせないものであった。

嘉悦大学の地域貢献のはじまりは、近隣住民に嘉悦女子短期大学が理解され、受け入れられるためには、何ができるか探るところからだった。それが家庭婦人バレーボールであり、嘉悦女子短期大学の特色の施設・スポーツ愛好心・女子教育をいかすことであった。一つ一つが小さい特色でも、すべてを合わせれば地域貢献に向かって歩き出すことができるのである。

② 大会運営

a) 役員・予算

先に述べたように、大学の近くに、家庭婦人バレーボールに親しみ、その連盟役員を務める方々がおられたので、その方々にまず大学の意図を理解していただくことからはじめ、協力を得られることとなった。

大会の役員は、大学側(筆者)と連盟役員を務める地域側(3名)とし、予算・会場準備など総合的な運営準備は大学が受け持ち、チームの選抜・審判やその他大会運営については両者の協議に基づき決定することとした。

予算については、学校法人嘉悦学園と嘉悦女子短期大学、そして卒業生の組織である「光風会」の協力を得て、大学側が全額負担することとなった。各チームの参加費・登録料は徴収しない⁶⁾。

b) 大会名称

嘉悦学園・嘉悦女子短期大学主催ということから嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会とした。(以下嘉悦杯とする。)

『嘉悦杯』『KETSU CUP』の略称を使用する。

c) 嘉悦杯の特徴づくり

運営委員(大学側担当(筆者)と地域側担当)でどのような大会を目指すかを検討した。

- ・ 会場はバレーボールを行うには最適な施設、嘉悦記念体育館を利用する。
- ・ 参加チームは12チームとする。(1チーム15名)
- ・ 参加チーム数については、大学の所在地の小平市を若干優遇する。
- ・ できるだけたくさんのチームに出場してもらうため、連続出場はなしとし、地区、各区・市郡で順番制とする。
- ・ 1回戦敗退がないよう、最低2試合出来る予選リーグと取り入れる。
- ・ 家庭を持つ主婦に負担のかからないような日時の設定を考える。(スタート当時は、日曜日より土曜日開催を希望された)
- ・ 金銭的な負担をかけない⁶⁾。
- ・ 何度でも出場したくなる楽しみな大会・地域交流ができるような友好的な大会を目指す
- ・ 連盟主催の試合⁷⁾では経験できない、地域だからこそその楽しめる大会とする。
- ・ 勝敗にこだわる大会でなく、参加者が気持ちよくプレーできる大会とする。(スポーツマンシップ、マナーを大事にする。)
- ・ 自転車で手軽に通える距離(大学内に臨時の駐輪場を用意)
- ・ 子供や家族を同伴しやすいように、学園祭実施中に行う。
- ・ 原則として、審判が出来るチームであること。(連盟の主催する講習会を受けている)

以上のように、通常の大会では経験できないことを出来るだけ多く取り入れ、参加者が気持ちよくプレーできることに配慮した。開催場所については、普段の大会では予選を勝ち進まない、条件のいい体育館でプレーできないという現状があったので、嘉悦記念体育館の利用は絶対に喜ばれると確信した。

参加チーム数は最低2試合を前提に、嘉悦記念体育館のキャパシティも考慮して12チームとした。

何よりも地域交流・友好的な大会であってほしいと、実力重視のチーム選抜はやめ、マナーを重んじる大会にしようとして地域側の担当者（大会役員）から申し出てくれた。22年もの継続は主催者側の提供だけでは成り立たず、地域側の担当者・参加者の心構え・協力が重要であることは言うまでもない。それを考えると、地域側の担当の方々には心より感謝申し上げたい。

〈運営メモ〉

《第1回 嘉悦杯（昭和61年10月「花小金井祭」にて）》

- ・ 参加チームを小平市・小金井市・保谷市（現、西東京市）各4チームずつ、計12チームとした。
- ・ 試合方式は予選リーグ戦（3チームでリーグ戦。勝者1チーム決勝トーナメントへ）
- ・ トーナメントで準決勝・決勝を行う
- ・ 予選リーグ戦と準決勝は2面使用。決勝はセンターコート1面（張り替える）
- ・ 決勝戦は入場行進から行い、全国大会のような雰囲気とする。ラインズマンも嘉悦短大バレーボール部が行う。電動式観覧席を用意し、見学者に利用してもらう。
- ・ 表彰式を行い、優勝チームには、優勝カップを授与する。（その後毎年、優勝杯返還を行っている）
- ・ 優勝チーム・準優勝チーム・第3位チーム（2チーム）には表彰盾・メダル・ボールを授与する。入賞チームは記念撮影を行う。
- ・ 参加賞として、記念Tシャツ・ボールを提供した。

決勝戦でのセレモニー（入場行進）は、普段なかなか経験できることではないので、参加選手の気持ちを高揚させ、持続への意欲を高める上で役立ったと思われる。さらに優勝カップ・メダル授与も同様である。

参加賞のボールも各チーム、用具の充実には費用がかかるので、大変喜ばれた。また、参加賞のTシャツは喜ばれるだけでなく、大会の広報・本学の広報の役目を担っている。現在、「KETSU CUP」のロゴとイメージキャラクターは定着している。

2. 嘉悦杯の20年の実績 ～継続は力なり～

当初、小平市・小金井市・保谷市からスタートしたところ、予想以上の反響を呼んだ。口コミで嘉悦杯の評判が広がり、年々、役員をとおして参加の希望が寄せられていった。表1)のように毎年、参加する市が増え、近年では多摩地区だけでなく23区からの参加も実現している。（強い要請により、特例として埼玉県新座市からも出場を認めたケースがある。）

嘉悦短期大学の所在地が小平市なので、優先的に他市よりもチーム数の優遇を行ってきた

表1 嘉悦杯家庭婦人バレーボール 市・区参加チーム数の推移 (1986年～2007年)

	大会回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	
		年	61	62	H1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	p*s
1	小平市	4	3	3	3	3	2	3	2	2	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2	1	1	2
2	小金井市	4	3	2	1	0	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	保谷市	4	4	3	3	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	1	2			
4	田無市				1		1	2				1				*西	東	京	市⇒		1	1	1
5	東村山市		2					1	1				1	1	1	1	1			1			
6	多摩市			1	1			1					1										
7	調布市			1				1										1					
8	府中市			1			1	1				1							1			1	
9	狛江市				1	1																	
10	日野市				1			1		1	1	1	1					1	1				
11	三鷹市				1	1	1	1	1	1	1	1	1						1				
12	東久留米					1		2	1				1		1	1		1					1
13	武蔵野市					1		1	1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
14	日の出町				1						1							1					
15	国立市							1							1		1						
16	国分寺市			1			1	1	1	1	1				1	1	1		1	1			1
17	立川市						1			1	1	1		1						1			1
18	昭島市							1		1	1			1						1			
19	八王子市							2							1								1
20	東大和市							1					1										
21	福生市																						
22	町田市							1															
23	青梅市								1	1			1										1
24	清瀬市						1										1						
	多摩連合																					1	
25	世田谷区					1		1									1						
26	杉並区					1		1				1		1		1		1					1
27	練馬区						1	1	1	1	1	1		1		1		1			1		
28	中野区						1	1	1	1	1	1		1		1			1		1		
29	新宿区							1				1											
30	豊島区														1								
31	渋谷区																	1					
32	北区																			1			1
33	目黒区																			1			
34	新座市																		1				
注)・網掛けは記念祭 ・PSは「パールシニア大会」の略 ・昭和64年(平成元年)は「昭和天皇御崩御」(2007年2月17日)のため、途中まで準備は行われていたが、大会は見送ることとなった。																					合計	270	

が、他市からの参加要望が多いので、現在では2チームに止まっている。(他市は全て1チーム)

a) 嘉悦杯 5周年大会 (平成3年)

参加チームの要望にこたえ、初めて多摩地区を越えて、23区(世田谷区・杉並区)からの参加が実現し、それ以降毎年2チームは23区に割り当てる。但し、比較的大学に近い地区・チームを優先とした。

b) 嘉悦学園創立90周年記念大会 (嘉悦杯 第7回)

嘉悦学園創立90周年記念大会として、通常12チーム参加のところ、30チームの参加を試みた。大学に隣接する、小金井公園の敷地内にある小金井体育館を使用し、2箇所利用の開催とした。参加チーム数が多いので確かに盛況ではあったが、やはり、嘉悦記念体育館が利用できないことを嘆く参加者の声を聞き、その後12チームの枠は超えていない。

《10周年記念大会(平成8年)は第7回(平成5年)に「嘉悦学園九十周年記念祭」を行ったので、通常開催とした。》

c) 嘉悦杯 15周年大会 (平成13年)

特別な大会にはしなかったが、小平市の要望に答え、この年小平市の参加を3チームに増やした。また、平成13年1月に田無市・保谷市が合併し西東京市となったので、以降、西東京市からは2チーム参加も可能とした。

d) 嘉悦杯 20周年記念大会

これも以前から役員の提案であった、50歳以上の大会を手がけることとなった。高齢化社会といわれている中、家庭婦人バレーボールというスポーツでは、すでに東京都バレーボール連盟の50歳以上の「いそじ大会」、⁸⁾60歳以上の「ことぶき大会」があり、多摩バレーボール連盟でも「パール・シニア大会」「シニア大会」といった大会が盛んである。そこで、嘉悦杯20周年を記念して50歳以上の「パール・シニアクラス」が実現した。但し、通常クラスで、参加を待っているチームもあるので、「ノーマルクラス」、「パール・シニアクラス」をそれぞれ6チームずつの参加とした。大会終了後の「パール・シニアクラス」の反響は予想外に大きく、すぐに次の開催要請がきているほどである。

Ⅲ. 嘉悦杯に関するアンケート調査と分析

地域住民にとって嘉悦杯はどういう大会なのか。また、地域貢献の一環を担っているかど

うか調査するため、アンケートを行った。(アンケートは記述式)

(2007年9月調査 過去5年以内、もしくは2回以上、嘉悦杯への参加がある小平市・小金井市・西東京市・武蔵野市・府中市・三鷹市・国分寺市・杉並区・中野区の家婦人バレーボールチームから120名)

1. 嘉悦杯についてのアンケート調査の結果 (回収 110 / 120)

〈質問1〉 家庭婦人の皆さんにとって、嘉悦杯はどのような大会ですか。(複数回答可)

- ・ 他の地域、チームとの親睦・交流が出来る大会 33
- ・ 特別な大会 18
- ・ 家庭婦人バレーボールの活性化への貢献 12
- ・ 参加できることに喜びを感じる・楽しい大会 11
- ・ 大学の支援がいい 8
- ・ 大学・学生との交流が楽しみな大会 4
- ・ 世代を超えた大会 4

〈質問2〉 嘉悦杯のいいところはどんなところですか。(複数回答可)

- ・ (市・連盟の枠を越えた) 普段対戦できない他のチームとの交流がもてる 47
- ・ 大学(学園祭など)・学生との親睦・交流 34
- ・ 地域交流に貢献 18
- ・ 大学からの支援(参加費なし、賞品・記念写真)がうれしい 13
- ・ 運営がとても良い 8
- ・ 環境・施設が良い 11
- ・ レベル高い、勉強になる 3
- ・ 世代を超えた交流 2

(その他) 4

- ・ 長く続いているところ 1
- ・ 選抜制で参加チームのマナーがいい 1
- ・ 簡単なゲームを取りいれたら 1
- ・ 日ごろの練習成果を出せる 1

〈質問3〉 嘉悦杯に今後期待することはどんなことですか。(複数回答可)

- ・ 今後も継続してほしい。また参加したい。 54
- ・ 50歳以上大会などいろいろな世代の大会の開催 11
- ・ 参加チーム数の増加・参加地域の拡大 8

- ・ 学生との交流がもっと盛んになること 8
- ・ 従来どおりの開催（少数・他地域参加） 3
- ・ 各賞（特別賞）を増やしてほしい 2
- ・ 強いチームとも対戦してみたい 1

〈質問4〉 嘉悦杯は地域の方々に貢献できていると思われますか？

はい	いいえ	わからない
95	0	15

〈質問5〉 「はい」と答えた方例えばどんなどが…（具体的に）

- ・ 他のチーム（近隣・他の地域）との交流。大会後も交流もてるきっかけになった 23
- ・ 学園祭中の開催で学生と交流がもてる。 12
- ・ 嘉悦大学について興味が湧いた。 11
- ・ 家族・子供にも行楽・勉強になった 11
- ・ 大学の大会への支援（費用・施設） 3
- ・ 家庭婦人バレーボールの活性化 2

〈質問6〉 嘉悦杯において何か問題がありますか？

はい	いいえ
5	105

「はい」と答えた方例えばどんなどが…（具体的に）

- ・ 駐車場が少ない 1
- ・ 観戦場所がせまい 3
- ・ 審判が出来ないチームがいた 1

〈質問7〉 嘉悦大学が嘉悦杯以外に地域に貢献できると思うものは何だと思えますか？

- ・ 各種スポーツ教室・大会。講演会など 16
- ・ 小・中学生向けスポーツ教室・大会など 6
- ・ 障害者・高齢者との交流活動・各市民団体への参加 ・ボランティア活動 9
- ・ 大学生に指導してもらいたい。 5
- ・ もっと嘉悦大学の存在を他地域に広めてほしい 2
- ・ 施設開放 2

2. アンケート調査の分析

〈質問 1〉 家庭婦人の皆さんにとって、嘉悦杯はどのような大会ですか。

「他の地域、チームとの交流が出来る大会」が33件であった。いつも同市や同連盟内の試合が多い中、嘉悦杯に出場すれば、普段中々交流できない他地域のチームと試合ができるという評判が定着していることがわかる。

「特別の大会」18件というのは、「伝統のある大会」、「レベルが高い大会」、「リラックスできる大会」、「開催目的が素晴らしい」、「勉強になる」、「目標にしている大会」などの回答をまとめて「特別な大会」とした。地域住民が各連盟に加盟して行われる競技大会（試合）とは違う、特別な存在として嘉悦杯を捉えてもらえている。

年々主催者が減り、大会が少なくなるという現状を考えると、大学主催で、開催が定期化されていることは「家庭婦人バレーボールの活性化への貢献」になるという回答12件が示している。

以上の回答を複合して、「参加が楽しみ」、「楽しい大会」という回答を引き出しているとみられる。多くの大会では必ず参加費の徴収があり、施設準備を当番制にしている大会が多い中、嘉悦杯では、予算・施設準備を含む運営を全て任せられるということで「大学の支援がいい」8件。その他、大学の学園祭中に行われることが評価されているのは、嘉悦杯以外に大学や学生との交流を求めている参加者がいることを示している。「大学・学生との交流が楽しみ」4件。

また、家庭婦人バレーボールというのは、それぞれのチーム事情により、様々な年齢層でチーム構成がなされていて、嘉悦杯にいろいろなチームが集まるとことによって「世代を超えた交流がいい」と感じるようだ。さらに、昨年実施した、50歳以上クラスの「パール・シニア」大会に参加されたチームを目の当たりにし、いろいろな刺激を受ける機会となった。

〈質問 2〉 嘉悦杯のいいところとは？

ここでは「普段対戦できない他のチームとの交流がもてる」が47件と圧倒的に多い。区市・連盟の枠を越えた、交流・親睦を目的とした大会が、現実には少ないという状況を明らかにしている。スポーツの多くの試合が、勝ち進むことを目的とされる中、交流・親睦をテーマに掲げた大会も、スポーツには必要だといえる。

筆者の予想以上に多かったのが「大学・学生との親睦・交流」34件であった。特に学園祭中の開催が喜ばれていることは、大学に所属するものとして、うれしいことである。多くの大学関係者が思うことだろうが、年々、学生による学園祭が低迷し、頭を抱えることも多い。しかし今回の回答のように大学・学生との交流を好意的に思ってくれているとは、予想外であった。

少子化により大学の生き残りをかけて、多くの大学が様々な策を講じる中、スポーツを掲

げた地域貢献は大学のイメージアップになり、今後もキーワードになるといえよう。

また、「運営が良い」では運営がスムーズ・段取りがいいといった意見の集約で、規模が小さくても、それを生かした大会にしていることが理解されているとみてよいであろう。

さらに 具体的に「地域交流に貢献している」というのも、大学の地域に対する思いと20年以上の継続が評価されたものとする。

その他の意見には「身近に感じる」という声が多いことから、地域貢献・地域交流も大きなことばかりに着目するのではなく、身近な交流をおろそかにしてはならないと実感した。

〈質問3〉 嘉悦杯に今後期待することはどんなことですか。

問いに対して、今までどおり「継続してほしい」、何度でも「参加したい」が54件という結果であった。他の回答も結論としては嘉悦杯の開催を前提に、さらなる活性化を求める前向きな回答であった。特に、スポーツ社会でも高齢化が進む中、家庭婦人バレーボールでいう、50歳以上の大会というのも、今後ますます本格的に実施していくべきであろう。

「参加チーム数を増やしてほしい」8件という要望については、バレーボールに適した体育館として嘉悦記念体育館は評価されているが、バレーボールコートをもつ場合、コートサイドが狭く、見学者が余裕をもって座れない状況になる。(待機場所が体育館内にない)これは大会開催当時から懸念されたことだが、実は、このようなマイナス要素を運営方法でカバーするというで開催した経緯がある。参加チームを12チームにし、予選リーグを取り入れたのも、行動パターンを試合を行うか、審判をするか、昼食をとるかの3パターンに分け、コートサイドに人が溜まらないよう配慮したからである。予選リーグ終了後は、家路につく参加者が増えるので、決勝戦はセンターにコートを作り直して、1面で思いきりプレーしてもらい、見学者にも電動式スタンドにて応援してもらうことにしている。参加チーム数の増加は嘉悦記念体育館の規模から難しいが、回答8件ということは、この件に関して、比較的参加者に理解されているといえる。それに参加チーム数が少なければ、各チームの試合数を増やせる。(1回負けてすぐ帰るといことがない。)多くの参加チームも試合数が多いこと望んでいることから、マイナス要因をプラスに出来た。

〈質問4〉 嘉悦杯は地域の方々に貢献できていると思われますか？

はい	いいえ	わからない
95	0	15

スポーツ大会である嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会が、地域貢献の役割を担っていると、9割近くの地域住民が指示をしてくれていることは、筆者及び嘉悦大学にとって励みになる数字である。

また「わからない」との回答は比較的、嘉悦大学から離れた地域の方の回答であったこと

を捕捉しておく。

〈質問 5〉「はい」の方 例えばどんなところが…

ここでも、「同地区・他地域の交流」や「大学の学生との交流」が中心だが、参加者の「家族や子供たちが一緒に来て楽しめる大会」として、「地域に貢献している」と評価してくれているようだ。学園祭の模擬店で食事をしたり、子どもたちも、試合ばかり見ているとあきるので、各種催し物を見て回ったり、有効に活用してもらっている。特に「大学生たちが子どもたちの面倒を良くみてくれた」という回答も「大学・学生との交流」の中に含まれている。つまり、学園祭中の開催は、嘉悦杯のみならず、嘉悦大学のイメージアップにも一役かっていることがわかる。

嘉悦大学は2001年（平成13年）経営経済学部（男女共学）を開学し、嘉悦女子短期大学を嘉悦大学短期大学部と改称した。小平市に移転して（1982年）から約20年近く、近隣住民に理解を得られるようになったところで、男子学生の出現は、ふたたび、近隣住民に対し不安を持たせてしまった。（特にバイク通学・違法駐車・騒音・ゴミ問題、タバコなど）

現在では、大学で徹底した指導を行っているが、今度は嘉悦大学の（男子を含む）学生のいいところをこういった地域交流でアピールしていくことが肝要であると思う。

〈質問 6〉 嘉悦杯において何か問題がありますか？

はい 5 いいえ 105

嘉悦杯に問題がないというより、参加者は嘉悦杯のコンセプトを良く理解してくれていることを、示しているといえる。大会開催前に、必ず、勝つことを目的とした大会でなく、交流・親睦をテーマにした大会であることや、嘉悦記念体育館の利用について書面にてお願いもしているが、何よりも22年もの歴史の中で、嘉悦杯がどんな大会なのかよく理解されている結果といえよう。

「駐車場」や「体育館での見学場所」についての意見は、当然予想していた問題であるが、少数意見であったことからそう読み取れる。

〈質問 7〉 嘉悦大学が嘉悦杯以外に地域貢献できるものは何か？

嘉悦大学でも様々公開講座が用意されているが、今回のアンケート対象者がバレーボール愛好家ということもあり、各種スポーツ大会・スポーツ教室を望む声が多い。そして、小・中学生対象のスポーツ大会・スポーツ教室の希望も多かった。

中には、公立の学校は教員の異動があるので、指導者がよく変わるという。今まで活動が

盛んであったクラブも突然、顧問がいなくなり、低迷するという問題を抱えているので、「是非、大学生にコーチにきてほしい」という意見や「大学生の練習を見せてほしい」などの意見もあり、今後、実現にむけて努力できることは、早い時期に取り入れるべきであると考え

る。
また、嘉悦大学・学生の「障害者・高齢者との交流活動・各市民団体への参加」についても求められている。

3. 結果と今後の課題

以上の結果から嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会は、参加者の住む地域内だけに止まらず、広く他地域において、交流・親睦の役割を果たしていることがわかった。そして、参加者はそれを地域貢献だととらえている。スポーツ大会にありがちな競技性を重視するのではなく、あくまでも交流・親睦をめざし、22年もの間続けてきたことで、地域の貢献に一役かっていると認知されたということになる。

たとえ規模が小さくとも（嘉悦杯の場合、参加チーム数が少ない）、20年以上の継続と実績、また、今後も続けてくれるだろうという期待と安心感を抱かせているということも、地域貢献にとって重要なことだといえる。

そして、嘉悦杯だけに止まらず、主催している大学に対しての評価も高くなることは、18歳人口の減少という問題を抱える大学にも具体的な提言となったはずである。

さらに、自分たちの住む地域の大学に足を踏み入れ、若い学生たちと交流を持つことを望んでいて、そんな些細なことも地域に対しての貢献だとしてくれるのなら、大学は、今後、様々な形で大学の財産を提供できるということになる。

まとめ

嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会の実績やアンケート調査により、地域住民にとってスポーツは、十分交流・親睦の役目を担っていることがわかった。そして、規模に関係なく小規模の大会でも、地域住民は身近で、必ず実現・実行され、それにより親睦・交流の機会が増えることを望んでいる。さらにそれが継続されることにより、自分たちの住む地区はもちろん、地域間がさらに拡大し、交流の輪が広がることを、社会貢献だと評価している。

そして、大学が行う社会貢献もその規模にかかわらず、地域の特性（ex. 東京多摩地区は家庭婦人バレーボールが盛ん）と大学の特色や得意分野において、相互の共通点を見つければ、たとえ小さな（スポーツ）大会・（スポーツ）教室でも、地域住民はその大学を身近に感じ、さらなる交流を持とうと考える。

多くの時間・予算・人材を割いても、具体的に実現できず、続かなければ意味がない。実現・実行、継続は地域住民の期待であり、大学への信頼感である。

以上のように、真の地域貢献とは、地域と共存しながら身近なところから実行し、継続することが肝要である。それには、スポーツの果たす効果は大きく、社会貢献を目指す大学にとって、取り組みやすく、実現しやすい貢献の仕方であることをしめした。

謝辞

アンケートについては、小平市・小金井市・西東京市・武蔵野市・府中市・三鷹市・国分寺市・杉並区・中野区の家家庭婦人バレーボールチームの皆さんご協力いただきました。また、本稿を執筆するきっかけとなった嘉悦杯家庭婦人バレーボール大会の運営に、長年携わっていただいた、小平市の永井道子氏、山田ミツ子氏、小金井市の栗原栄子氏、保谷市（現西東京市）の竹中衛子氏、武蔵野市の栗村武子氏にも、ここに深く感謝の気持ちを表し、心よりお礼申し上げます。

注)

- 1) 嘉悦大学は1903年（明治36年）創立者である嘉悦孝により、日本初の女子を対象にした「私立女子商業学校」として設立され、100余年の歴史を持つ。2001年（平成13年）に嘉悦大学経営経済学部を開学し、男女共学の四年制大学となるが、それまでの長い歴史は女子の短期大学として知られている。
東京都千代田区富士見にキャンパスがあった「日本女子経済短期大学」（当時の名称）（1950年～1981年）が、東京都小平市花小金井に移転すると共に「嘉悦女子短期大学」と改称された。
- 2) 「日経グローバル」 日本経済新聞社と日経産業消費研究所が地域創造のため専門情報誌として創刊
- 3) 明治大学 「メイジ・コミュニティー・スポーツ・クラブ」卓球教室ホームページ <http://meijicsc.tfn.ne.jp/>
- 4) 平成19年度「東京都家庭婦人バレーボール連盟」区郡市別登録チーム数は208チーム「多摩バレーボール連盟」家庭婦人の部169チーム（H19.9.15現在）（内、小平市15チーム、小金井市12チーム、西東京市12チーム）
：〈資料〉多摩バレーボール連盟 平成19年度 「多摩バレーボール連盟 連盟登録・大会申し込み要項」
- 5) 1992年 第39回秩父宮妃賜杯全日本バレーボール大学女子選手権大会初優勝（短大での優勝は史上初）
- 6) 大会参加費 多摩大会で1回につき¥5,000（東京都でも5,000～7,000円）これとは別に登録料がある。予選を勝ち上がって全国大会になればさらに¥15,000～20,000
家庭婦人バレーボールも大会に出場するには、登録料の上に大会参加費を支払う。地域予選大会から全国大会出場となると、さらに参加費を支払う。（平成19年「第38回 全国ママさんバレーボール大会」全国大会の参加費 は1チーム 2万円。
- 7) 平成19年度「東京都家庭婦人バレーボール連盟」主催で春季・秋季大会、全国ママさん大会都予選会、シニア大会など（年間8回程度）。「多摩バレーボール連盟 家庭婦人の部」で多摩家庭婦人バレーボール大会、パールシニア大会、シニア大会、300歳ミックス大会。
- 8) 家庭婦人バレーボールの全国大会にも19回（平成19年度）の歴史をもつ「全国いそじ大会」

などがあるほど、高齢者のスポーツは今後も充実するとみられる。

参考文献

嘉悦克編 『嘉悦学園のあゆみ ～九十周年を迎えて～』 (1993) 学校法人嘉悦学園 p.3、p.113

嘉悦大学編 『KAETSU LIFE 2007』 p.128

光行淳子編 『平成18年版 教育小六法』 (2006) 学陽書房

角 一典 『旭川実践教育研究』 8号 (2004) 「地域と大学との連携に関する試論」 p.33-40

鹿島建設技術研究所 『Technology』 NO.170 (1991) 「大空間構造物の種類」

<http://www.kajima.co.jp/tech/katri/leaf/cont/leaf-j-170a.html>

株) 学生情報センター 『大学改革提言誌「Nasic Release」』 第10号 (2006)

境政義・川口啓太対談 「地域貢献・生涯教育としての大学スポーツ」

<http://www.nasic.co.jp/release/10/000146.php>

株) 学生情報センター 『大学改革提言誌「Nasic Release」』 第12号 (2006)

川口啓太 「大学スポーツでコミュニケーション能力を獲得」

<http://www.nasic.co.jp/release/12/000170.php>

後楽園スタジアム社史編纂委員会編 (1990) : 『後楽園スタジアム50年史』 後楽園スタジアム、
p.396

<http://www.geocities.co.jp/Playtown-Darts/7539/yakyujosi/kanto/kourakuen.htm>

鹿島建設 『新建築』 5月号 (1986) 「パラソルドーム 嘉悦記念体育館」

『日経グローバル』 79号 (2007) 「全国大学の地域貢献度調査」

<http://www.nikkei.co.jp/rim/glweb/backno/no79.htm>